

式章と念珠を身に

若い頃、「式章をつけて礼拝しなさいよ、念珠を手にお念仏しなさいよ」とやかましく言われ、少しうるさく感じていました。しかし振り返って考えますと、身だしなみや作法を通し、大切なことを教えてくださったことに気づきます。

式章は、本来、頭を下げるはずのない私に、下げずにおれないわが身であると教えていただきます。念珠は、手を合わすはずのない私に、合わせずにおれない、ご恩を知らせて下さいます。いつでもどこでもの阿弥陀さまのはたらきが、式章や念珠となって届けられ、わたしを育て続けて下さるのです。

仏前にお参りする際には、式章を身につけ、念珠を手で合掌することが、阿弥陀さまを敬う、最もふさわしい姿となります。

50年に一度の大遠忌を迎えます。先代の姿を引継ぎ、後に伝えるべき姿として、お寺に参拝する際は、式章をつけ念珠を手にし、お念仏申させていただけます。



親鸞聖人七百五十回大遠忌法要記念門徒式章
(協力：鍵長法衣店・浜屋株式会社)

連絡先

©監修 本願寺仏教音楽・儀礼研究所

シリーズ大遠忌I

装束

僧侶の装束

縁儀の光景から

荘重な雅楽の調べに乗って、阿弥陀堂から御影堂へと続く「縁儀」*の列。それぞれの役割に応じた、色とりどりの装束を身にまとった僧侶たちが、歩みを進めます。

僧侶は、きらびやかな七条袈裟や五条袈裟をまとっています。これらの袈裟は、小さい布を縫い合わせてできています。それは、昔、インドでは、僧侶は端切れ布を拾い集め、縫い合わせて一枚の布を作り、それを着ていたことに由来しています。

*導師以下の諸僧が、行列をして堂縁を通して入堂する作法



内陣の僧侶たち

さあ、いよいよ僧侶が内陣に入り、法要が始まります。

内陣は、ご本尊を中心とした宗教的な“聖なる空間”です。威儀を正した装束を身にまとった内陣の僧侶たちは、お勤めの内容によって、ある時はお釈迦さまの説法の再現者となり、またある時は浄土の菩薩がたを演じる役割もします。

「まるで極楽浄土を見ているみたい！」
さもありなん。私たちは、御堂で行われる荘厳で厳粛な儀礼に参加しているうちに、阿弥陀さまの宗教世界へと向かう意識改

革が自然に惹き起こされているのです。

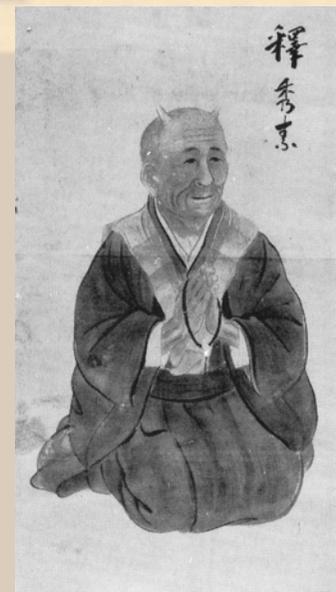
あっ、散華がはじまりましたよ。お浄土の蓮の花びらが舞い散っているのですね。

縁儀（『蓮如上人五百回遠忌法要写真大鑑』より）

門徒式章と念珠

肩衣から式章へ

結婚式に出席する時など、よそ行きの服に袖を通すと、自然と身が引き締まり、相手への敬いの心が起こります。では、皆さんは、お寺へお参りする時、どんな服装でお参りされますか？



浅原才市像（安楽寺蔵）

その昔、仏前に座る際には、着物の上から肩衣を身につけていました。当時、肩衣の着用は、最高の敬意を表す正装だったのです。あの有名な、鬼の角がはえている浅原才市さんの肖像画も、ちゃんと肩衣を着た合掌の姿です。

昭和7（1932）年に、その肩衣を簡略化した「式章」が制定されました。それ以降、真宗門徒にとって、式章は仏事の際の正装とされるようになりました。